

どんなに頑張っても、教師の時間と労力には限りがあります。そう考えると、「これを教えるなら個人指導でも一斉指導でも大差ない」「これは個人指導をする効果が大きい内容だ」と、指導形態を意識的に使い分ける必要があるでしょう。

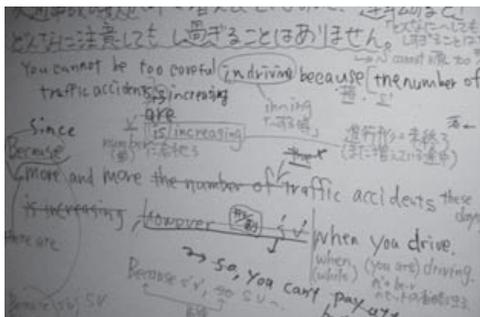
英作文には個人指導が効くと思います。しかし生徒一人ひとりの作文を毎日添削するのは、教師にも生徒にも大きな負担です。また、添削中には「これは他の生徒にも共有してほしい」というポイントがよく見つかりますが、授業時間を割くのも勿体ないし、プリントにするのも手間がかかります。さらに、教師がねじり鉢巻きで添削しても、テキストに書いた文を提出されたり、同じ間違いを何度も繰り返されたりすると、ガックリくることもあります。

「そんな悩みを一気に解決!」というオイシイ話はあるわけがありませんが、私が高校で実践した「ホワイトボード添削」をご紹介します。よろしければ、問題や実施方法をアレンジして、お試しください。

\* \* \*

以下は、EISAKUB 'A' Nの活用例です。

- ① 白板やペンを設置します(学年の廊下、ホール、職員室前など)。
- ② 方法やルールを紙に書いて貼ります。私は、白板上部に「みんなで作文・みんなで添削。1日1つ出題します。『我こそは』と思う人は(部分的にでもいい) 答を黒で書いてみよう。何人でもOK。他の人



の答を直したい場合は青。次の日までに先生が赤で添削します」と書いた細長い紙を貼りました。

- ③ 白板中央に線を引いて左右2面に分け、1面に1問ずつ出題しますが、締切日をずらしません。締切は、休日・行事・出張のスケジュールを確認し、必ず添削できる日に設定します。
- ④ 知らんぷりをしながら、生徒が答を書くのを楽しみに、締切日を待ちます。記入をせかしたり、ヒントを与えてしまったりせず、そっと見守りましょう。
- ⑤ 締切日、できれば生徒の帰宅後、こっそり添削します。2回目以降は、たとえば右面に添削したら、左面にある前日の添削を消し、新しく出題します。(終わった問題は、長く残さずサッと消すのが良いと思います。私は記録用に毎回写真を撮りましたが、これをテスト出題や解説に使うのは避けました。EISAKUB 'A' Nを「やりたいから、やる」ものにするには、余計なものをくっ付けないことが大事です。

\* \* \*

「書きなさい」とも「よく書いたね」とも言われなけれど、前を通るたびに少し気にかかる、そんな距離感がいいのかもしれない。こちらも授業の行き帰り、白板前で立ち止まる生徒の姿を見るのは、嬉しい瞬間でした。ときには、数人が手に教科書・辞書・ノートを持って相談し合っていたり、他教科の先生が考え込んでいたり…。朝のうちに問題をノートに写し、自分で作文してみて、翌日白板を見ながら自己添削している生徒もいたようです。私が添削を始めると、みんな帰ったはずの教室から生徒が出てきて、「やっぱりそうか」などとつぶやきながら、ずっと見ていることもありました。

誰かが青で直したところを、さらに別の誰かが青で直してあるポイントは、丁寧に赤で解説します。白板をぎっしり埋める黒・青・赤の重なりは、この場に集う人々の静かで熱い対話の記録なのです。